

程度補語“極、死”について

謝 平

1. はじめに

比較構文に用いられない高い程度を表す補語には“得很、得要命、得不得了”など“得”を伴う補語以外にも、“極、死、坏、透、疯、呆、之极、至极、非常、异常、万分、绝顶、透顶、无比、绝伦”など“得”を伴わない表現もある。これらの表現のうち、“極、死、坏、透、疯、呆、毙”などの単音節の程度補語は“了”を伴うことが多い。そのため、侯精一等(2001:10-11)では“了”を伴う“极了、坏了、死了、透了”の形で程度補語として扱われている。

また、これらの補語は“很、极”などの程度状語と異なり、すべての形容詞と共起することができるというわけではなく、共起制限が多くみられる。

(1) 冷极了/冷死了/*冷坏了/?冷透了/*冷疯了/*冷呆了

[とても寒い]

红极了/?红死了/*红坏了/红透了/红疯了/红呆了¹

[とても赤い/大いにもてはやされている]

贵极了/贵死了/*贵坏了/*贵透了/*贵疯了/?贵呆了

[とても高い]

¹ “红疯了”、“红呆了”は「とても赤い」という意味より「大いにもてはやされている」という意味で使われることが多い。しかし、次の例のように文学的な表現では、「とても赤い」という意味で用いられる場合もある。

李灵霞的床上摊着一张印着红双喜的龙凤吉祥的大床单以及两个红疯了的双喜灯笼的枕巾…… (张欣《梧桐梧桐》)
[李靈霞のベッドには一枚の紅双喜と龍鳳吉祥の模様の大きなシーツと二枚のものすごく赤い双喜提灯模様の枕カバーが敷かれていた。]

帅极了/²帅死了/*帅坏了/*帅透了/*帅疯了/帅呆了

[とても格好いい]

高兴极了/高兴死了/高兴坏了/²高兴透了/*高兴疯了/*高兴呆了

[とても嬉しい]

伤心极了/伤心死了/伤心坏了/伤心透了/*伤心疯了/*伤心呆了

[とても悲しい]

漂亮极了/漂亮死了/*漂亮坏了/²漂亮透了/*漂亮疯了/*漂亮呆了

[とても綺麗だ]

伟大极了/*伟大死了/*伟大坏了/*伟大透了/*伟大疯了/*伟大呆了

[とても偉い]

上記の例(1)のように、程度補語“极”以外の“死、坏、透、疯、呆”には共起することができない形容詞がある。その理由について、张谊生(2000)では次のように指摘している。

由于虚化还不很彻底，这些副词²都会或多或少地存留一些原词的语义积淀，必然会在使用中附带某些形象色彩，表露一些主观情态。

张谊生(2000:148-149)

[まだ完全に虚化されていないため、これらの副詞には多かれ少なかれ元々の原義が残っており、用いられるときには必ず何らかのイメージやニュアンスを帯び、主観的感情を表すことになる。]

この指摘の通り、例(1)においても補語には元々の原義が残っていると考えられる。しかし、これらの補語が具体的にどのような意味機能を持っているのか、またどのような形容詞と共起することができるのかについては具体的に分析されていない。本稿では、これらの程度補語の中でも特に使用頻度の高い“极、死”を取り上げ、意味論と統語論の観点から、それぞれの意味機能及び共起制限について考察する。

² 张谊生(2000)は“在现代汉语中，能够充当补语的副词都是程度副词”と述べ、“很、极”だけでなく、程度補語になる語をすべて副詞としている。そのうちの“很、极、死”などの十六語は状語と補語の両方を担うことができることから“可补副词”とされ、“慌、透、坏、绝伦、透顶”などの十六語は補語にしかできないことから“唯补副词”として分類されている。また、“要命、要死、不行、不成、邪乎、吓人、够呛、可以、不得了、了不得”などの十一語についても“唯补副词”として認められつつあると指摘している。

2. 程度補語“極、死”と“了”の関係について

2.1 “了”は程度補語の一部か否か

程度補語“極、死”などは程度状語や“得”を伴う程度補語“很”などとは異なり、多くは“了”を伴い、[A+極+了]、[A+死+了]という形式で用いられる傾向にある。

- (2) 洞里黑极了，一股阴森潮湿的冷气迎面扑来。³(→ ?黑极)

[洞窟の中は極めて暗く、湿った冷たい空気が顔に当たった。]

- (3) “是的。”刘云声音低极了。(→ ?低极) (皮皮《比如女人》)

[「はい。」劉雲の声はとても低かった。]

- (4) 可不能让外婆看见，她要伤心死了。(→ ?伤心死) (谌容《梦中的河》)

[おばあさんに見られてはいけない。(見られたら)彼女はきっと死ぬほど悲しむだろう。]

- (5) 全市都在闹抄家，到处敲锣游街批斗啊，紧张死了，紧张到极点了，所以我们才不想活了。”(→ ?紧张死) (冯骥才《到底有没有罪？》)

[都市は至るところで家が差し押さえられ、至るところでデモや批判闘争が行われていた。死ぬほど緊張していた。緊張は頂点に達していた。だからこそ私たちは生きたくなくなってしまったの。]

例(2)～(5)において、“了”を用いないと若干不自然な表現になる。特に後ろにポーズが置かれる場合、“極、死”などのような補語は“了”を伴う傾向がある。そのため、侯精一等(2001)は、“極+了”、“死+了”を一つの固まりとして程度補語として扱っている。しかし、“極、死”などの程度補語は必ず直後に“了”を伴う必要があるというわけではない。

- (6) 对，对。你说的对极啦。(姚雪垠《李自成》)

[はいはい。あなたの言う通りだ。]

- (7) 她一定会伤心死的。(王朔《我是你爸爸》)

³ 以下、出典の示していないものについてはすべて“北京大学语言研究中心(CCL)语料库”によるものとする。

[彼女はきっと死ぬほど悲しくなるだろう。]

- (8) 别提啦，真急死人！ (杨沫《青春之歌》)

[言わないでください。とても焦っているんだ。]

- (9) 父亲劈面就是一耳光甩过来。我痛极，却一声不吭地捂住脸。

(虹影《好儿女花》)

[父は私の顔をめがけてびんたを一つ食らわした。とても痛かったが、何も言わずに手で顔を隠した。]

例(6)のように、程度補語“极、死”の後に“啦”のような語気助詞が用いられる場合や、例(7)のように“会～的”という推測のモダリティが用いられる場合、また、例(8)のように目的語が後置される場合や、例(9)のように“极”の後ろに文が続くような場合には、“了”がなくても成立するケースもある。

さらに、目的語と“了”の両方がある場合、例(10)のように目的語を“了”の前に置くことも、また、例(11)のように“了”に後置することも可能である。

- (10) 请你不要再提那件事……羞死人了! (→ 羞死了人)

[二度とそのことは言わないでください…とても恥ずかしいから。]

- (11) 我的心都死了，我恨极了我自己。(→ 恨极我自己了) (曹禺《雷雨》)

[私の心はもう死んでいる。私は自分をとても憎んでいる。]

例(10)、(11)は、いずれも A と補語“死、极”の間に目的語を置く事ができない。したがって、“极、死”に後置する“了”は、以下に示すように[A + {极/死} + (O)]全体を修飾しており、程度補語の一部とはいえないと考えられる。

- (12) 〈高兴极〉了 [非常にうれしい]

〈伤心死〉了 [死ぬほど悲しい]

〈恨极我自己〉了 [自分を非常に憎んでいる]

〈羞死人〉了 [とても恥ずかしい]

2.2 “了”はモダリティ助詞か否か

“了”は「アスペクト助詞」として扱われる場合、通常“了₁”と“了₂”に分けられる

(呂叔湘主編 1984 など)。⁴呂叔湘主編(1984)によれば、“了₁”は動詞に後置し、動作の完了を表すのに対し、“了₂”は文末に置き、事態、状況の変化或いは新しい事態の出現を表したり、文を完結したりする役割を果たすという機能がある。一方、刘月华等(2001)のように文末の“了”を語気助詞として扱う先行研究もある。また、春木・劉綺紋(2003)、劉綺紋(2005)では、“了”のアスペクト機能を出発点として、程度表現と伴う“了”のモダリティ機能を分析している。

呂叔湘主編(1984)では、形容詞に後置する“了”は“了₁₊₂”と解しても良い場合もあれば、“了₂”と解する場合もあると指摘しており、さらに、“太+A”や“A+極”などに後置する“了”を“了₂”として扱っており、出現した状況を認めるのみで変化を表さないことがあると指摘している。⁵

確かに、以下の例(13)、(14)の“了”が、呂叔湘主編(1984)の指摘するように、変化を表していないことは明白である。

(13) 这儿美丽极了，充满了春天的气息！（→ *美丽极）

（安徒生童话《丑小鸭》）

[ここは極めて美しく、春の息吹がいっぱいだ。]

(14) 刘东北后悔死了，后悔不该这么早就跟老宋说。（→ *后悔死）

（王海鸰《中国式离婚》）

[劉東北は死ぬほど後悔した。こんなに早く老宋に言うべきではなかったと後悔した。]

それでは、この“了”は「文を完結させる」という機能を持っているのであろうか。

⁴ 呂叔湘主編(1984：314)では次のように指摘している。

“了”有两个。“了₁”用在动词后，主要表示动作的完成。如动词有宾语，“了₁”用在宾语前，“了₂”用在句末，主要肯定事态出现了变化或即将出现变化，有成句的作用。如动词有宾语，“了₂”用在宾语后。

⁵ 呂叔湘主編(1984：317)では形容詞に後置する“了”について次のように指摘している。(下線は筆者による)

形容词后面的“了”，可以表示一种变化已经完成，出现新的情况，应该算是“了₁₊₂”；但如果只着眼于当前的情况，也可以说只是“了₂”。

孩子大～，做父母的也就轻松多～ | 人老～，身体差～ | 头发白～，皱纹也多～ | 这地方比以前热闹多～

有的“形+了₂”只肯定已经出现的情况，不表示有过什么变化。

这个办法最好～ | 这双鞋太小～ | 这家伙可坏～ | 这出戏好极～

有的“形+了₂”则表示即将出现的情况。

一会儿天就亮～ | 头发快全白～

(13') 这儿 || [美丽极]了, 充满了春天的气息!

(14') 刘东北 || [后悔死]了, 后悔不该这么早就跟老宋说。

例(13')、(14')で示すように、“了”は直前の“A+極/死”の部分にかかっており、しかも“美丽极了”、“后悔死了”の後ろにいずれも文が続いていることから、必ずしも「文を完結させる」という役割を持っているとはいえない。

また、2.1 でも述べたように、“A+極/死”の後ろに“了”が置かれなくても成立する場合がある。

(15) 天上海中那两轮皎月，冷极静极，却荡人心魂。

(恺蒂《海天冰谷说书人》)

[空と海の中のあの二つの月は、非常に冷たくて非常に静かで、人の心を揺さぶる。]

(16) 荧认为一定是个娇柔的女生，结果扭头一看，是个酷死的帅哥。

(Google)

[荧は(あの人は)可愛い女子生徒だと思って振り返ってみたら、なんとすごくクールなイケメンだった。]

“A+極/死”は例、例(15)のように後ろに文が続く場合や、(16)のように連体修飾語になる場合などには、“了”がなくても成立する。さらに、既述のように“了”の代わりにほかの表現が用いられても文が成立可能な場合もある。

(6) 对，对。你说的对极啦(*了)。 (再掲)

(7) 她一定会伤心死的(*了)。 (再掲)

(8) 别提啦，真急死人(了)! (再掲)

例(6)～(8)は命題に対して、それぞれモダリティの意味が付加されている。例えば、例(6)は“了”に代わり肯定と感嘆を表す語気助詞“啦”が用いられており、例(7)は“会……的”により推測のモダリティが表現されるため、“了”は必要ない。一方、例(8)は、文末に“了”を加えても成立するが、程度補語“死”の後ろに置かれた目的語“人”により音節的に補われており、さらに、感嘆のイントネーションで語気も表さ

れているため、“了”がなくても成立する。しかし、上で指摘したモダリティ要素を落とした場合、やはり文末に“了”が必要になってくる。つまり、程度補語“極、死”などのような高い程度表現に伴う“了”は一種のモダリティ機能を果たしていると考えられる。

劉綺紋(2005:160)では、“極、死”などのような程度表現に伴う“了”の機能について次のように述べている。

“～极了”“最～了”の“了”は、極限に位置する基準に対して〈基準達成〉の操作を行った結果、通常に考えられる「よい」、「もう十分よい」、「非常によい」などよりも遥かに高い水準における「極めてよい」、「最もよい」という〈極限性〉の意味効果を生じさせるのである。

劉綺紋(2005)が「〈極限性〉の意味効果を生じさせる」と指摘しているように、“～极了、～死了”の“了”は、“A+極”、“A+死”で表される「ものすごく高い程度にある状態」、「もうこれ以上ない状態」の極限に達しているという意味を表している。つまり、この“了”は話し手の主観的判断が表され、モダリティ的機能を持っていると考えられよう。

3. 共起制限について

程度補語“極、死”と共起する語としては、まず形容詞が挙げられよう。しかし、すべての形容詞と共起することができるのであろうか。大滝(2000)では、中国語の形容詞を「判断形容詞」、「褒貶形容詞」、「描写形容詞」、「感覚感情形容詞」の四つに分けている。このうちの「描写形容詞」は状態形容詞などが含まれる類であり、いわゆる“不、有点儿、很、最”によって修飾されない形容詞であるが、この種の形容詞は程度補語とも共起しないため、本稿では考察の対象としない。本節では、形容詞については大滝(2000)の分類に基づいて、「属性判断形容詞」、「褒貶評価形容詞」、「感覚感情形容詞」の三つに分類し、程度補語“極、死”との共起制限を考察する。「属性判断形容詞」は好き嫌いという感情が表れず、事物の属性などを表す「中立的な」形容詞である。一方、「属性判断形容詞」とは反対に、「褒貶評価形容詞」は好きか嫌いかという話し手の感情が含まれる形容詞であり、「感覚

感情形容詞」は感覚や心理状態を表す形容詞である。この三類のうち、「属性判断形容詞」と「褒貶評価形容詞」の別は文脈に依存しており、同じ語であっても文脈によって「属性判断形容詞」になる場合もあれば、「褒貶評価形容詞」になる場合もある。例えば、次の例(17a)の“高”は身長の高低を表す中立的な表現であり、「属性判断形容詞」として用いられている。一方、例(17b)の“高”は知識のレベルなどの高さを表し、プラスの意味を持ち、「褒貶評価形容詞」となる。

(17) a. 陈老师个子很高。

[陳先生は背がとても高い。]

b. 我们的老师水平都很高，而且很敬业。

[私たちの先生はレベルがとても高い。しかもとても勤勉である。]

程度補語“極、死”と共起する語には、形容詞以外にも、心理動詞⁶や一部の非動作フレーズなどがある。以下、程度補語“極、死”の共起制限について考察する。

3.1 “極”の共起制限について

“極”の意味については、《康熙字典》の解釈に次のような記述がみられる。

极者屋脊之栋，今人谓高及甚为极，义出于此。

[極とは屋根の一番高い所の棟である。今の人は高いこと及び甚だしいことを極と言ひ、その意味の由来はここにある。]

“極”は元々「建物の一番高いところにある棟木」という意味を表し、名詞であった。その後、「一番高いところ」という意味から“登峰造极”[最高峰を極める]の“極”のように「頂点」などの意味に派生し、“极力”[力の限りを尽くす]、“极目”[遠く眺める]などのように動詞として用いられるようになり、さらに“达到顶点”[頂点に達する]、“达到最高程度”[最も高い程度に達する]という意味に拡張している。

吕叔湘(1984:250-251)が指摘するように、程度補語として用いられる“極”は程度状語として用いられる場合と異なり、口語的である。また、周知のように、“了”を

⁶ 范晓など(1987:57)は“爱、恨、同情、信任”などのような情緒を表す語だけでなく、“记得、联想、认为、知道、觉得”など認知を表す語についても心理動詞に分類されると指摘しているが、これらの語は程度補語と殆ど共起しないことから、本稿では認知を表す語は考察の対象外とする。

伴う傾向のある程度補語の中では、“極”は共起制限が最も少なく、殆どの形容詞や心理動詞と共起することができる。

- (18) 树叶儿绿极了，小草青极了。 (朱自清《春》)
 [木の葉は緑が濃く、草は青々としている。]
- (19) 他是一个矮极了的小老头儿。 (徐志摩《谒见哈代的一个下午》)
 [彼は非常に背が低いおじさんだ。]
- (20) 不过他走得慢极了。 (张炜《柏慧》)
 [だけど彼は歩くのが非常に遅い。]
- (21) 大烟桃子里面的籽，香极了。 (高建群《大顺店》)
 [ケシの朔果のなかの種はすごく香ばしい。]
- (22) 臭极了，臭得像刚厠下来的马粪…… (靳文《杂谈外交语言》)
 [とても臭い。排出されたばかりの馬の糞みたいに臭い…]
- (23) 小管在荷叶当中，真是漂亮极了。 (周而复《上海的早晨》)
 [管さんははすの葉っぱの中において、本当にきれいです。]
- (24) 让血与汁染得又紫又乌，真是难看极了。 (廖静夫《资江船夫曲》)
 [血と汁が染み付き、どす黒くなっていて、本当にみっともない。]
- (25) 突然他放声大哭。哭得伤心极了。 (梁晓声《激杀》)
 [急に彼は声を上げて大声で泣き出した。とても悲しそうだった。]

例(18)～(20)の程度補語“極”は自然属性を表す「属性判断形容詞」“绿”、“矮”、“慢”と共起している。これらの語には話し手の感情が現われておらず、属性的なものであるといえる。一方、例(21)～(24)は「褒貶評価形容詞」“香”、“臭”、“漂亮”、“难看”と共起している。「褒貶評価形容詞」には話し手の好き嫌いといった感情が表出される。程度補語“極”は例(21)の“香”や例(23)の“漂亮”のようなプラスの意味の語と共起することができるだけでなく、例(22)の“臭”や例(24)の“难看”のようなマイナスの意味を表す語と共起することもできる。⁷ また、例(25)のように程度補語“極”は心理的状态を表す「感覚感情形容詞」と共起することもできる。

形容詞との共起においては、程度補語としての“極”の文法的振る舞いは程度

⁷ 「プラスの意味の語」、「マイナスの意味の語」はそれぞれ中国語の“褒义词”、“贬义词”に相当する。

状語の“極”に似ているが、次の例のように程度状語として用いられる“極”とは異なり、一部の非動作動詞フレーズと共起することができない。

- (26) 现在我们再看历史，在历史上的记载和论断有时也是极靠不住的
…… (→ ?靠不住极了) (鲁迅《魏晋风度及文章与药及酒之关系》)

[今私たちが再び歴史を振り返ってみると、歴史の記載や論断にはとても信頼できないところもある…]

- (27) 虽然如此，却也有极会做官的…… (→ *会极了做官)
(李少军《冯道的做官之道》)

[そうであっても、役人としてとても上手い人もいる…]

- (28) 这对他们的发展极有好处。(→ *有极了好处)

[これは彼らの発展にとっても役に立つ。]

上記の例のように、“極、很”などの程度状語は、動作性が低く、程度性を有する一部の動詞フレーズと共起することが可能である。しかし、これらを程度補語として用いた場合には、許容度が著しく低下したり、文として成立しなくなったりする。それはどのような理由によるものなのだろうか。

例(26)～(28)において程度状語“極”と共起する述詞を見てみると、例(26)の“靠不住”は補語を伴う動詞フレーズであり、例(27)の“会做官”、例(28)の“有好处”は動目構造である。程度補語“極”もほかのすべての補語と同じように動詞の直後に置かなければならない。しかし、上記の例はいずれも動詞の直後に何らかの成分があり、その成分は動詞と意味的に緊密に結びついていることから、程度表現は動詞の前に置かれることになる。程度補語“極”を動目構造の動詞に後置することができないケースが多いのはこのような理由によるものと考えられる。もちろん、次の例(29)～(31)のように動目フレーズとは共起可能な場合もある。

- (29) 雪，冷面清明，纯净优美，在某一个层次上，像极了我们的心。
(林清玄《雪的面目》)

[雪、冷たく清らかで、純粹かつ優美である。ある意味ではわれわれの心にとってもよく似ている。]

- (30) 我只爱小苹一个，而且爱极了她。(于晴《红苹果之恋》)

[私は小萃しか愛していない。しかも彼女をととても愛している。]

(31) 我恨极了你!

[私はあなたをととても憎んでいる。]

例(29)の動詞“像”は「誰か或いは何かに似ている」という点に焦点が置かれる可能性もあるが、「似ている程度」に焦点が置かれる可能性もある。例(30)、(31)の心理動詞“愛、恨”は「愛したり、恨んだりする対象」に焦点を置く可能性もあれば、「愛したり、恨んだりする程度」に焦点を置く可能性もあるが、例(30)、(31)の場合は、“極”を動詞の後ろに置くことから、焦点が愛する、恨む程度にあることは明らかである。しかし、“極”は程度状語として用いられるのか、それとも程度補語として用いられるのかによって、それぞれ役割が異なる。程度状語として用いられる場合、事実を述べる叙述的表現となるが、程度補語として用いられる場合、その心理状態の程度を取り立てており、焦点は程度にあると考えられる。

以上の考察のように、程度補語“極”は「属性判断形容詞」と共起することができる。また、プラスの意味の語、マイナスの意味の語に関わらず、殆どの「褒貶評価形容詞」、「感覚感情形容詞」と共起することも可能である。一方、程度状語“極”と異なり、程度補語“極”は動詞の直後に置かれるという特徴があり、動詞の直後にほかの成分があり且つその成分が動詞と緊密に結びついている場合、補語“極”によって程度を表すことができない。

3.2 程度補語“死”の共起制限について

既述のように、程度補語“極”は殆どの形容詞や心理動詞、一部の非動作動詞フレーズと共起することができる。程度補語“死”についても述詞の程度を表しているが、“極”と異なり、共起可能な形容詞や心理動詞には制限がある。

(32) 他瘦极了，象个骷髅一样，原来刚放出来不久。(→ *瘦死)

(老舍《鼓书艺人》)

[彼は非常に痩せていて、どくろみたいだと思ったら、なんと釈放されたばかりだったのか。]

(33) 那天空高极了，远极了，一只雪白的海鸥在秋阳中上、下飞舞，令人神清气爽。(→ *高死 *远死) (欧阳山《苦斗》)

[空はとても高くて、とても遠い。一羽の真っ白なカモメが秋の太陽の中を上へ下へと舞うように飛んでいて、いい気持ちになる。]

(34) 它静起来一动不动，一发怒，张开大螯，八条腿跑得快极了。

(→ *快死)

[それ(蟹:筆者注)は静かになるとじっとしているが、怒り出すと、はさみを広げて、八本の足で走るのがすごく速い。]

(35) “它们飞得慢极了。”一个男孩告诉母亲。(→ #慢死)

[一人の男の子が「彼ら(雁:筆者注)は飛ぶのが遅いね。」と母親に言った。]

(36) 她的眉毛又细又长，一双眸子简直黑极了。(→ *黑死)

(礼平《晚霞消失的时候》)

[彼女の眉は細くて長い。二つの瞳はまったく真っ黒だ。]

(37) 天冷极了，下着雪，又快黑了。(→ *冷死)

(安徒生童话《卖火柴的小女孩》)

[ものすごく寒く、雪が降っていた。また、日も暮れようとしていた。]

例(32)～(37)において、程度補語“极”と共起している形容詞はいずれも自然属性を表す「属性判断形容詞」であるが、これらの形容詞の殆どは程度補語“死”と共起することができない。例(32)の“瘦”、例(33)の“高”、“远”、例(34)の“快”もそれぞれ客観的に人の外貌、空の様子、蟹の動くスピードを描写しており、補語“死”と共起しにくい。一方、例(35)の“慢极”は“慢死”に置き換えることが可能であるが、両者のニュアンスは大きく異なる。“慢极”を用いる場合、“瘦”は「属性判断形容詞」とみなされ、話し手の好き嫌いの感情は表に出てこないが、“慢死”が用いられる場合、“慢”は「褒貶評価形容詞」とみなされ、雁の飛ぶスピードが遅いことに対する話し手の不満な気持ちが表現される。このように、元々は「属性判断形容詞」であっても、文脈によって話し手の感情が入った「褒貶評価形容詞」になる可能性があり、その場合、“死”と共起することもある。また、例(36)の“黑”は色を表しており、例(36)のように好き嫌いを表さない文脈において補語“死”と共起すると、不自然な表現となってしまうが、次のような文脈では成立が可能となる。

(36') 本地网通也黑死了，月 ADSL 费用为 1500 大洋，你说黑到家了吧？

(新华网)

[地方の网通もとてもあくどい。ADSLの費用が毎月1500元とは、あくどいことこの上ないでしょう。]

例(36)の文脈では、“黒”は色が黒いことを表す「属性判断形容詞」であり、“死”と共起することができないが、例(36’)のように「褒貶評価形容詞」として「腹黒い」という意味で用いる場合には、程度補語“死”と共起することが可能となる。同様に、例(37)の“冷”についても、主語“天”があることから、自然属性的文脈であるため、“冷死”を用いることはできないが、次の例(37’)のように寒い天気に対して「死ぬほど」という主観的評価が表れる場合には、“冷死”という表現は成立する。

(37’) 队长，老趴这冷死了，让抽袋烟吧！（刘震云《故乡天下黄花》）
[隊長、ずっとここに伏せていて、死ぬほど寒い。一服させてくださいよ。]

以上の例から、程度補語“死”は「属性判断形容詞」と共起することが少ないといえる。次に程度補語“死”と「褒貶評価形容詞」との共起状況についてみる。

- (38) a. 爸爸说，这杯茶香极了！（→ ??香死）
[お父さんは言った。このお茶はとても香ばしい。]
- b. 这房间臭极了。（→ 臭死） (Google)
[この部屋はとても臭い。]
- (39) a. 这个可爱的小动物干净极了。（→ ??干净死）
(柯钧《人生哲学的枕边书》)
[この可愛い小さな動物はとても清潔だ。]
- b. 屋子脏极了。（→ 脏死）
[部屋はすごく汚い。]
- (40) a. 水底下有好多海螺、海贝，好看极了。（→ ??好看死）
(李仁臣・凌志军《潮起潮落写青春》)
[水の底にはほら貝や貝などがたくさんあって、とてもきれいだ。]
- b. 这个公主长得丑极了，嫁不出去。（→ 丑死）

(罗锦鳞《世界上最古老的希腊戏剧》)

[このお姫様はとても醜くて、嫁ぐことができない。]

例(38a)の“香”、例(39a)の“干浄”、例(40a)の“好看”はプラスの意味を表し、これらの語と対義的な意味を表す例(38b)の“臭”、例(39b)の“脏”、例(40b)の“丑”はマイナスの意味を表す。例に示したように、「褒貶評価形容詞」と共起して何かを評価するとき、程度補語“死”は殆どのマイナスの意味の語と共起することができるが、プラスの意味の語と共起させると不自然な場合が多い。また、例(38b)、(39b)、(40b)のように、程度補語“死”はその状態の程度が高いことを表すだけでなく、“臭、脏、难看”というマイナスの状態に対する話し手の嫌な気持ちも含み、「度が過ぎる」或いは「程度が甚だしい」という意味を表す。それは“死”の原義「死ぬ」が不吉なことを表すことから、マイナスのイメージになっているためであろう。しかし、近年“死”についても、プラスの意味の評価形容詞と共起して用いられる例もみられる。

(41) a. 满屋子都是香奈儿 5 号的的气味，大家都捏住鼻子，香死了。

(榛生《翠微路 37 号的春天》)

[部屋全体がシャネルの 5 番の匂いがした。皆、鼻をつまんでいた。匂いがきつすぎるから。]

b. 昙花真美呀！……她像一个睡醒的美人，正在舒展着她的肢体，一面吹出醉人的香气。啊呀，真香呀！香死了！

(汪增祺《昙花・鹤和鬼火》)

[月下美人は本当に美しい。…まるで眠りから覚めた美女のように、身体を伸ばしながら、人をうっとりさせる香りを噴出している。ああ、本当にもいい香り。のすごくいい香りだ。]

例(38a)の場合、“极”を“死”に置き換えると不自然な文となるが、例(41a)、(41b)の“香”は程度補語“死”と共起することができる。例(41a)の“香死”は、香水の匂いがきつすぎるという意味で用いられており、この場合の“死”には「度が過ぎる」というニュアンスがあり、マイナスのイメージである。一方、例(41b)の“香死”はマイナスのイメージはなく、「とてもいい香り」というプラスの意味になっている。話し手は敢えて「程度が甚だしい」という意味の“死”を用いることにより、誇張的に月下美人の香り

を取り立てている。同様に、例(39a)、(40a)の場合、“干净、好看”は程度補語“死”と共起しにくい傾向があるが、次の例のように共起が可能な場合もある。

- (42) 头一天是中午收到的，晚上随便擦擦就睡觉了，结果，第二天早上一照镜子，天啊，脸上干净死了，豆印淡的基本都消失了……
(Google)

[一日目はお昼に届いて、夜適当に塗って寝た。その結果、翌朝に鏡に映したら、顔はものすごくきれいになっていて、ニキビの薄い痕はほとんど消えてしまった。]

- (43) 那是那一年最流行的发型，叫做“麦穗儿”，挺贵的，花了我好几百块钱。我自己觉得挺好玩儿的，女朋友也说好看死了。于是我美滋滋的回家了，以为他会喜欢。
(姜昕《长发飞扬的日子》)

[あれはその年最も流行っていた「麦の穂」という髪形だった。結構高くて、何百元も使った。自分でも面白いと思っていたし、友達にもものすごくきれいだよと言われた。それで私はうきうきして家に帰った。彼はきっと気に入ると思った。]

例(42)はニキビを治す化粧品の効果について述べている。本来マイナス的イメージを表す“死”によって、化粧品を使った翌日に顔がきれいになったことに対する驚きの気持ちが表れ、間接的にプラスの意味として化粧品の効果を取り立てている。また、例(43)の“好看死”は新しい髪型に対する友達の褒め言葉であり、「ものすごくきれいだ」というプラスの意味である。程度補語“死”という極端な表現として用いて、大げさに髪型を褒めているというニュアンスが読み取れる。

上記の例(41)～(43)については、いずれも補語“死”を“極”に置き換えることができるが、ニュアンスは異なる。“極”は「これ以上のない」という高い程度を表す以外、好きか嫌かという話し手の感情は表されない。一方、“死”についても甚だしいという程度を表すが、それだけでなく、“死”は本来「死ぬ」という好ましくないことを表すことから、嫌味を帯びた表現となる。そのため、例(41a)のように、プラスの意味の語と共起しても「～過ぎる」というマイナスの意味を表し、マイナスの意味を表す「褒貶評価形容詞」と共起する傾向がある。しかし、例(41b)～(43)のように、敢えて“死”をプラスの意味を表す形容詞と共起させ、「死ぬほど」、「想像もつかないほ

ど」、「ものすごく」というように極端に表現する場合もある。

また、「褒貶評価形容詞」と異なり、「感覺感情形容詞」はマイナスの意味を表す場合だけでなく、プラスの意味を表す場合にも“死”との共起が可能である。

(44) 这个思想使他痛苦死了。

[この考えは彼を死ぬほど苦しめている。]

(45) 星子说：“有好几天了，难受死了。” (方方《桃花灿烂》)

[星子は言った。「何日もあった。とても気分が悪い。」]

(46) 我在他那里整整玩了一个下午，我拉着他下象棋，他老让我吃他的子，吃得我开心死了。 (白先勇《玉卿嫂》)

[私は午後ずっと彼のところで遊んでいた。彼に将棋を一緒にしてもらった。彼はいつも私に駒を取らせてくれて、とても楽しかった。]

(47) 要真是那样的话，农民们就高兴死了，不光省劲还节省钱哩。

[本当にそうだとしたら、農民達は死ぬほど嬉ぶだろう。手間が省けるだけじゃなくて、お金も節約できるんだからね。]

程度補語“死”は例(44)、(45)のようにマイナスの意味を表す「感覺感情形容詞」と共起することができるだけでなく、例(46)、(47)のようにプラスの意味を表す「感覺感情形容詞」と共起することも可能である。但しその場合、例(46)のように主体が第一人称の場合や、例(47)のように主体(“农民”)の立場に立って用いられるようなケースであることが多い。程度補語“死”はプラスの意味を持つ語と共起しにくい、「感覺感情形容詞」は心的状態を表し、主観的であり、特に話し手自身の感情を表すとき、敢えて“死”を用いることで、その感情がプラス、マイナスにかかわらず誇張的に形容することが可能となる。特に自分自身の心理状態を表す場合に用いられる傾向があり、若干砕けた表現となる。そのため、通常の日常会話ではなく、少し改まった場面では、特に他人のことについて表現する場合、程度補語“死”はやはりプラスの意味の「感覺感情形容詞」とは共起しにくくなる。

(48) a. 陈章良说生活在北京虽然很累很累，但开心极了。(→^{??}开心死)

[陳章良は、北京で生活するのはとても疲れるけど、とても楽しかったと言っている。]

- b. 1979年6月、全国政协第五届二次会议决定增补贺子珍为全国政协委员。当人们把这一喜讯告诉她时，她高兴极了。(→ “高兴死”)

(孙闻浪《贺子珍的晚年岁月》)

[1979年6月、全国政治協会第五回第二次会議で賀子珍は全国政治協会委員として増補された。このいいニュースを彼女に告げた時、彼女はとても喜んだ。]

例(48a)、(48b)は、他人に敬意を表す文脈であり、しかも他人の心理状態を表すため、砕けた表現の程度補語“死”は用いにくくなる。

4. まとめ

程度補語“極”、“死”はいずれも“了”が後置される傾向がある。候精一等(2001)では“了”を伴う“极了”、“死了”の形で程度補語として扱われているが、本稿では考察の結果、“了”は補語の一部ではないことを指摘した。また、“了”は「もうこれ以上ない状態に達している」という意味を表し、高い程度にある状態を取り立ているというモダリティ機能を果たしていることについても言及した。

“極”、“死”はいずれも程度が高いことを表すが、それぞれが独自の特徴を持っている。“極”は元々「建物の一番高いところの棟木」という意味から「頂点に達している」という意味に派生し、さらに「最も高い程度になる」という意味に拡張している。また、しばしば“了”を伴う程度補語のうち、“極”の共起制限は最も少ないといえるが、動目構造などのフレーズと共起することは少なく、程度状語としての“極”ほど自由ではないことがわかった。

一方、“死”は元々「死ぬ、死にそう」という意味を表すことから主観的な表現となり、マイナスのイメージがある。そのため、程度補語“死”は自然属性などを表す形容詞と共起しにくい。「褒貶評価形容詞」のうち、マイナスの意味の形容詞と共起する傾向があり、嫌味を含む好ましくないことを表す場合に用いられる。しかし、近年、口語では敢えてプラスの意味の形容詞と共に用いることにより、誇張的に高い程度を表現する場合もある。また、「感覚感情形容詞」については、マイナスの意味の語だけでなく、プラスの意味の語とも共起が可能であるが、他人の心理状態を

表すような場合には、プラスの意味の語とは共起しにくくなる。なお、程度補語“死”は若干砕けた表現であり、改まった場面では用いられにくい傾向があることを指摘した。

[主要参考文献]

- 牛島徳次・菱沼透監訳(2003)『中国語用例文法辞典』 東方書店
- 大滝幸子(2000)「動詞と形容詞とが構成する文法構造—中国語 3 種類と日本語 1 種類の対照研究—」 金沢大学中国語学中国文学教室紀要 第 4 輯
- 春木仁孝・劉綺紋(2003)「語気助詞“了”のモダリティー機能—アスペクトからモダリティーへ—」『言語文化共同プロジェクト 2002—言語における時空をめぐって』 大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科
- 劉綺紋(2005)『中国語のアスペクトとモダリティー』 大阪大学出版会
- 范晓、杜高印、陈光磊(1987)《汉语动词概述》 上海教育出版社
- 侯精一等(2001)《中国語補語例解》 商務印書館
- 黄国营・石毓智(1993)〈汉语形容词的有标记和无标记现象〉 《中国语文》第 6 期
- 刘兰民(2003)〈现代汉语极性程度补语初探〉 《北京师范大学学报》(社会科学版)第 6 期
- 刘月华等(2001)《实用现代汉语语法》 商務印書館
- 吕叔湘(1984)《现代汉语八百词》 商務印書館
- 石毓智(1991)〈现代汉语的肯定性形容词〉 《中国语文》第 3 期
- 张谊生(2000)《现代汉语副词研究》 学林出版社